

【講演】

「クマ問題を考える」

講師：東北芸術工科大学 教授 田口 洋美 氏

こんにちは。田口と申します。本日はよろしくお願ひいたします。

この石川県で講演をさせてもらうのは今回が初めてでして、学会などで研究発表はしておりますが、こういう形で講演をさせていただくのは今回が初めてということで、今日はよろしくお願ひします。

今日僕がお話しします内容というのは、この5月に『クマ問題を考える—野生動物生息域拡大期のリテラシー—』（山と溪谷社：ヤマケイ新書）という本を出版しました。この本の出版がきっかけで今回お招きいただいたと思っております。今日お話しする内容は皆様にお配りしたレジュメにもありますように、かなり量が多いのですが、ところどころ時間を見ながら話を進めていきたいと思っています。

■クマ問題の核心は出没をなくすこと■

今日の話の中心はですね、クマ問題というのはまず第一に、一番重要なことは「出没をさせない」ことが重要だということなんです。被害に合わないとか、被害をどうやって防ぐかということも重要なのですが、一番大事なことは、人口密集地や日常生活が営まれている私たち人間の生活空間にクマを出すことがないようにすること。そのための対策を最優先に考えなければいけない。つまり、これまではそうではなかったということなんです。過去10年くらいの間に、クマによる被害が相当激烈なものになってきています。皆さんもご存知のように、昨年の5～6月には秋田県でタケノコの採取中にクマと遭遇し、4人の方が亡くなるという事故がありました。今年も、秋田県の田沢湖で女性が1人亡くなっておられます。こういうことがなぜ起きているのかということが、マスコミ等いろいろなところで騒がれていますが、森の中の問題と森の外の問題を分けて考える必要がある。そこでまず我々がやらなければいけないことは、森の外で起きている問題だろうと思うのです。つまり、都市の中や近郊農村の集落や耕地内で人がクマに襲われる。このようなことはあってはならないことなのですが、すでにおきはじめていて死傷者を出してしまっている現実があるんですね。

先週の土曜日、福島県の会津で講演を致しました。会津の喜多方というところがあります。喜多方ラーメンや蔵造りで有名な街ですが、その喜多方の街からちょっと外れた村の中で、集落の中ですよ。集落の中の畑で、朝おばあちゃんが野菜を取り入れていたら、そこでクマと遭遇して亡くなるという事故が起きています。集落の中で人が襲われて亡くなったり、大けがを負うという事故が最近目立ってきている。このようなことはあってはならない。安心安全だと思っている集落の中で、日常の安心安全が保たれないということになってきています。この問題を一刻も早くクリアする必要があると私は考えています。

この写真はヒグマですけど、これは羅臼、これは斜里です。ヒグマはもう街の中に出てきている。これが常態化してきている。人家の側にも出てきている。これはツキノワグマですけど、田んぼの横を歩いているクマをうちの学生がとらえたものです。

これはイノシシ。福島で撮られたものです。こちらは飯豊連峰のクマで友人が撮ったものですね。これは長野県の秋山郷の水田です。クマに荒らされた跡ですね。そしてこの田を荒らしたと思われる個体が捕まった檻。こういうことが山間の村や麓の村や街で起こり始めている。

これは植林地の樹皮剥ぎ被害ですね。先ほども話がありました。1980年代から90年代は、いろいろな野生動物の問題というのは山の奥で起こっていると認識されていた。要するに、

山菜を採ったり、溪流釣りをしたり、そういう中で遭遇事故が起こっていた。皆さんも記憶があると思いますが、アルプス乗鞍岳の登山口の駐車場で登山客の方々がクマと遭遇するということがVTRで撮影されてテレビ放送されたことがありました。そういうことが起こり出して、中山間地域に舞台が移っていき、中山間地域から平地の方に舞台がさらに移った。そしてそれが、今や2010年代に入ると都市周辺や平地農村で起こるようになってしまった。すでに都市の中に入ってきている。要するに、段階を踏んでクマたちや野生動物がどんどん人口密集地の方に入り込んできている。これを生息域拡大期という風に言っているわけですが、この生息域拡大の要因は何だったのかを考えなければいけない。その問題にまず触れておきたいのです。

## ■二極化する地方都市■

そのヒントとなるのは、この写真は福島県の会津若松です。ここに会津の鶴ヶ城があります。河川があります。こちら磐梯山です。会津若松は1990年代、バブル経済が弾けた頃ですね、その頃から膨張し始めます。市街地が膨らんでいくわけですね。同時にこの市街地の外への膨張と同時に、市街地の中心部では空き地、空き屋が現れ始めて、まるで虫食い状態で駐車場などが増えてゆく、いわゆるシャッター通りとか市街地のスポンジ化という現象も起き始めるわけですね。その現象と同時に市街地が膨らんでいきまして、この山際までびっしりと民家で埋まってしまう。二極化というのは要するに民家や宅地と森林という極端な空間の二分化が起きてきたわけですね。そして市街地と周辺の住宅地が一体化してしまったということです。そこを貫流する河川がある。この河川は1980年代までは三面張りの河川、コンクリートで河床と両側の堤防の法面を覆った河川ですね、これは当時非常に批判された。そして生物多様性等を考慮した上で、出来るだけ自然度を保ちながら浄化作用のある河川に戻しましょうということになった。多様な生態系を維持できる河川に戻しましょうということで、河川改修をしないで自然に近い形に代える努力を重ねてきました。そしてバブル期を超えてきて、その成果がやっと実ってきている段階に入ってきた。その成果が、結局はクマとかイノシシとか野生動物を人口密集地に導くことになってしまったと考えられます。河川の緑地帯を伝ってクマやイノシシは移動している。河川を泳ぎ下る個体もいる。これらは確認されていることです。ですから、我々が良かれと思ってやってきたことが、野生動物に対しては良かれには必ずしもなっていない。その反省をできるだけ的確にしていかなければいけないステージに入ったということなんです。

これは先ほどの鶴ヶ城のアップです。この辺にもクマが出ている。なぜそういうところにクマが出てしまうのか。ここ金沢市をグーグルマップで切り取って見たんですけども、段丘上にせり出しているテラス上にクマがよく出る。河川に挟まれている。条件としては非常にしやすい条件になっている。じゃあ出ないようにするにはどうしたらいいんだということになるわけですね。出沒するルートが出来上がってしまっていて、やはり金沢市でも宅地と森林が両極端になっている。市街地か森林か極端になっている。その二極化が野生動物を街の中に出やすくしているのではないかと考えられるのです。ですからこの二極化をなんとか三極構造に変えられないか。その努力が、除伐とかをやっていこうということですね。これも場所をきちんと選別し、考えながら除伐していった方が良いでしょう。

## ■木の実の豊凶と人里出沒のメカニズム■

これは福島県の捕獲数の推移を現したグラフです。木の実の豊凶と出沒の相関関係、先ほどの話にもありましたけれども、この因果関係が明確にわかっている。秋に関してはわかっている。8月の末くらいから9月、10月に関してはこの因果関係は結びつく。では春の出沒に関してはどうか。この辺がまだ良くわかっていない。この辺の整理が必要です。

これは環境省の資料で、平成28年度のクマの捕獲数を並べたものです。人身事故の数も載っていますが、昨年は秋田の4人という数しか載っていない。2010年とか2006年とか

多発出没が起こった時期に相当のクマを捕獲している。捕獲しているのにまた数年経つと出没し、捕獲をくり返している。クマって想像している以上にいるんじゃないか。クマの頭数がどこまで正確にわかっているかという、はっきりいって掴めていない。そんなはずはない、今の技術を持ってすれば、クマがどれくらいいるか予想がつくだろうとおっしゃる方が多いかと思いますが、実は掴めない。例えばニホンザルであるとか、ニホンジカ等、群れる動物であればある一定の群れの数を数えていくことができる。サルに関しては個体識別ができて、1頭1頭観察して名前も付けられていて、数が明確にわかる地域もあります。金華山のニホンザルは生息数が263頭ですと。一桁まで明確に出される。それは数えられるからです。ある日、1～2日かけて、手慣れた個体識別をできる人が10人くらいでぎっと数える。そうすると今年何頭の子ザルが生まれてきているとわかりますけれども、クマはサルのようにはいかない。だからある程度の予想しか立てられない。1頭から1万頭くらいのどこかに正解があることはわかっている。けれども絶対にこの数の中にいるということがわからない。実態が掴めていない典型的な動物。それを一生懸命努力しているんですが、なかなか把握できていないというのが現実なんですね。

これは農作物被害です。クマっていうのは莫大な農作物被害を出しているわけではない。圧倒的に多いのは実はイノシシでもない。圧倒的に多いのはシカです。その次にイノシシ、野鳥になります。クマというのは全体の0.9%に過ぎない。

クマの場合は何が大きいかというと、人的被害。つまり、我々の日常の安全な生活を得るためには、クマとのぶつかり合いを避けたいというのが我々の考え方で、人的被害を無くしたいというのが1番の目的になってくる。その人的被害の推移がどんどん高まっているということは皆さんもなんとなく感じていると思います。皆さんの日常の安心や安全をまず確保する。その上で森の中もということになります。ですから冒頭に申しましたように人口密集地で進行している人的な被害をまず止めたい、ということになるのです。

被害を見ていくと、どうも2回人身事故が起こるシーズンがある。春と秋です。今から十何年前は、春に起こる被害はほとんど山の中だった。山菜採り、タケノコ採り。この被害だったんです。秋は、キノコ採りや溪流釣りの時の被害だった。それが、秋の方から徐々に農村部の被害が出始めるんです。そして今は、この5～6年前の間に、なんと春にも、農村部あるいは都市の周辺で被害や目撃情報が出始めた。つまり、年間を通して場所を限らなくなっている。前々から、いずれそうなるよといっているけれども、実際に起こるまで対応できない。我々がとってきた手法の問題も大きいと思います。

それからもう一つ。これは一つの試みとしてやってみたのですが、ツキノワグマの捕獲率の上がり方と気温の上昇がマッチしているのかどうか。これは何ともいえません。これから細かい研究が始まると予想されます。要するに、気候変動、温度変化がクマの生息域を拡大することを後押ししている可能性を認めざるを得ない状況になってきている。ただ、これを科学的に裏付けるとなるとかなり面倒なことになりますので、こういう研究が始まるかどうかは何ともいえない。

これは石川県の出没情報です。こういう出没情報は各県で一生懸命作っている。一生懸命作っておられるんですが、出没の情報というのは出没したクマの数ではないんです。出没しているクマを目撃した、視認した人間の数なんです。つまり、500件、800件といったらマスコミが騒ぎますけれども、その数というのはクマの数ではない。クマを見た人間の数でしかない。問題なのは、逆に言うと人間がそれだけクマに見られてもいるということです。人間がクマを目撃したということは、クマが人間を察知した可能性が極めて高いということです。そこで回避行動をとって逃げていったりするわけです。その時に、我々は何をしてきたのでしょうか。たぶんその瞬間は何もしていないんです。

## ■ノンリアクションが生み出す悲劇■

例えば、神戸でイノシシが出没して、そのビデオを見せてもらったことがあるんですが、イノシシが通りを走っているのに郵便屋さんのバイクはイノシシを避けるんです。自転車も避けるんです。歩行者は黙って見ているだけなんです。ということは、イノシシにどういう人間の印象が残るでしょうか。自分が出て行っても人間は許す。人間は何の危害も与えない。避けてさえくれる。この経験の蓄積はイノシシにどのような行動を促すだろうか。つまり人間は自分たちと遭遇しても何もしないのだ。彼らは自分たちを避けてさえくれる親切な生き物だ、この経験の蓄積が出没をまねいているのではないか。つまり、見方を変えれば、出没は我々が引き出している。これは動物を調教する時でいえば条件付けです。動物は、自分が出て行った時に嫌われない、自分を排除してこない。ということは許されているわけですから、どんどん来ます。そして出てきた時に私たちがやってきた手法は、対処療法ばかりです。問題を起こした時に箱わながかけられて、そこで捕らえられる。捕らえられた個体は全部処分される。学習はないんです。これは狩猟の経験がある人は誰でも気が付きます。このやり方は誘因待ち伏せ猟と言うんですね。動物を誘っておいて、待ち伏せておいて、捕獲する。今、西日本で行われている箱わなのかけ方は全くこれです。確実に獲れるんです。つまり、イノシシの学習能力の高さを逆手にとって捕獲に利用するという手法です。

つまり、対処療法が野生動物に対してどのような結果をもたらすかということ、おいでおいでになってしまう。ですから、次から次へと出てくることになる。これをいつまでも続けますか。その度に我々の日常に危険がおよぶということです。この問題をクリアしていくためには、クマという動物に対して我々がノーだよということを明確に言わなければいけない。じゃあどうやって言うか。極端な言い方すると、車の前にきたらそのまま撥ねればいいんです。速度にもよりますがクマは滅多に死にはしません。車は大破します。人間が大変なことになったりしますから、そこは低速状態での話です。でも、そういうことを経験したクマは、今度は容易く来なくなる。野生動物は自分がケガを負うことは野生で生きていく上で大変なリスクになることを知っています。例えば車の前に動物がきたらクラクションをバフバフ鳴らす。煽る。脅しあげる。そこまですれば動物は逃げるし、怖いと思えば出てこないのです。ところが何もしないで、あぁクマだ、で終わってしまっている。目撃件数分、クマたちにOKだということを伝えてしまっている。これは訓化、教育しているといってもいいのです。条件付けを日々繰り返しているといっている。この経験の蓄積がこの多発出沒という現実を生んでいるのです。私たちは、自分たちの生活に追われて、他の動物たちとの付き合い方、間合いの取り方を忘れてしまったのです。

これが平成22年の全国的に大量出沒した年です。市街地の周辺に出てくるわけですね。たくさん報告されているんですが、とっているのは全部音無しの構えで、檻で獲っている。個体個体は何の学習もしていませんから、次から次へと出てくるということになります。まずAというクマが里近くに現れる。このクマが目撃され捕獲される。するとこの場所が空くわけです。AがいなくなったのでBがやってくる。クマにとっては実に良い場所ですからこの縄張りを得たBは里へまで現れる。するとまた捕獲。するとCがその空いた場所に入ってくる。これでは将棋で言う千日手で、単にくり返しです。このような構造は、狩猟の手法としてはかなり有効なやり方なんです。その有効なやり方をしているんですから、それは湧くように出てくるということになってしまう。こちらがそれを意図していなくても結果的にはそうになってしまう。誘引待ち伏せ猟、その場所にある人為的空間が餌場であり、クマにとって敵対者がいない、独占できる最良の場所として認識される。クマにとって良い場所は、そこが良い場所である限り、どのようなクマでもその場所がお気に入りになる。

それから、この出沒と目撃の情報が集中するのは河川及びその周辺、沖積低地が広がってゆく扇状地上になる。クマってというのは川は全然怖がらないし、泳ぎます。イノシシもです。例

えばイノシシなんかは追っかけて走ると必ず川に飛び込んで身体を冷やしますよね。そういうところを狙って川で待ち伏せるなんてこともしますね。クマも春の残雪期にはカモシカを捕ろうと思って追いかけて回して、最後雪の上に腹ばいになって寝ていたりします。彼らは体毛に覆われていて、汗をやたらにかけないので体温を調節するために身体を冷やす。身体が熱くなれば水の中に飛び込む。

先ほどもありましたが、クマが1年間でどうやって増えていくのかということも考えておかなければならない。そのモデル図を作ってみました。子どもは毎冬1～2頭産むわけですね。産むんですが、その子どもが生まれた年の5、6月頃はオスグマが交尾をしたがって、子どもを連れてメスグマに近づいて子殺しをする。今年NHKで1月頃放送しましたけれども、群馬県の足尾の山で観察しているツキノワグマの親子がいるんです。写真やビデオで記録を取っている方が2人ほどおられます。その足尾の親子グマなんですが、親は3年間連続して子どもを授かっているんです。毎年2頭産んでいるんです。ところが毎年2頭とも、3回に渡ってオスグマに食われています。だから2頭産んだら2頭そのまま育つと思ったら大間違いで、かなりの確率で子どもも食われている。ですから、単純に、山の木の実が豊作だったから翌年個体が増えると考えするのも危険です。どのくらいの率で子殺しが行われているかという調査はほとんど行われていませんので詳細は明らかではありません。そして実際に子殺しを目撃しようと思っても簡単に目撃できるわけでもない。二十何年間同じ山で記録し続けて初めて撮られた映像らしいのです。そこで観察している長谷川淳さんの話では、今年も2頭産んだみたいです。1頭は見つけられるが1頭は見つけれない。事故に遭ったのか、またオスグマに食べられたのか、それはわからない。そういう確率だということです。クマはクマの中で、生存のためにかなり激烈な戦いをしているというわけです。そのことを我々も知っておかなければならない。

これは山形県が作った、秋の豊凶と多発出没の数ですけれども、大凶作になると、完全に捕獲数、出没数が上がっている。山形県でやっている方法というのは、一応上限を決めて、1年間に捕獲できるクマの頭数は120頭台にしようと決めているんです。でも120頭台にしようとしても、上限を決めても、現実には多発出没が起こると現場は捕るしかないわけです。現場では人が襲われるかも知れないのに、のんびりやっていたらならない状況がある。まして、老人ホームが近くにあるとか、幼稚園があるとか学校があるとかということになると、おそらく猟友会は必死になって捕るしかないわけです。そうすると、数字の調整をしても意味がない。だから、上限を作る必要はないんじゃないかという議論がある。山形県の検討会でも本当に議論しました。一応作っておくことにしたのは、みんなが好き勝手に捕り続けてしまうと、かなり危険だという県の考え方がある。しかし、そのくらい捕っても全然問題ないと、猟友会は経験知で言っているわけです。この経験値と理屈の間の現実論というのが全然育たない。なぜかという、やはり研究が進んでいないんです。クマの生態や行動の研究も猟師たちの経験知に関する研究も、深まっていない。そこに問題があります。とくにクマ自体のカウンティングのテクニックの議論は全く進んでいない。去年、一昨年と、環境省が全国に1万6千頭くらいのクマがいると言いました。でも、本当に1万6千頭いるかどうかの検証は誰もできない。そういう問題がある中で考えていかなければいけないので、なかなか難しいということです。

ここでまとめておきますけれども、有害駆除による捕獲はほとんど檻による捕獲。被害申告に対応するため事後の処理となっている。既に、耕地周辺、居住区周辺に出没しているクマを適時排除、駆除する必要に迫られている。このため、速やかに捕獲が求められて、銃器の使用は控えられる。人口密集地だから。よって、ハチミツ等を使った誘引による箱わなでの捕獲とならざるを得ない。先ほどお話した誘引待ち伏せ猟に酷似している。即ち、出没は減らないということ。永遠に続くもぐらたたきとなっている。また、誘引による箱わなを使用するため、性別、成獣、幼獣に関係なく無差別な捕獲となる。即ち、捕獲率が飛躍的に上がった時点から地域個体群に与えるインパクトは大きくなる。これは実際にあります。山形で一つのわなをず

っとかけ続けてみた。最初に子グマが入った。次に母グマが入った。ずっとかけ続けていると、最後にオスグマが入った。結局全部獲った。ところが、全部獲っても翌年になれば別の個体がそこに入ってきている。つまり、どんなにそれを繰り返しても永遠に続けることになる。それは地域の住民や市民が永遠に不安を持ち続けることと同じであるわけですから、どこかでこの負の連鎖を断ち切らないといけない、ということです。

これは山形県がまとめた目撃情報です。見ていくとわかると思うんですけど、8月、9月の数字が落ちない場合、むしろ9月に増えたということになると、10月、11月に激的な出沒がくるということです。これは間違いなくおきています。8月から9月に関して出沒の数が減れば、こない。過去の経験から、これはどこの県にも言える事です。

これは秋田県と山形県で検証している数字を出したのですが、5月、6月に里に出てきているのは結構駆除しているんです。これが100頭を超えていく。秋田県だと130頭くらいまでいく。その数がある程度捕られていると、夏以降には出沒が起こらない可能性もある。この辺の読み方というのはまだまだ工夫がいる。ただ、傾向としては、8月よりも9月の出沒が多かった場合には、10月、11月はくるということはわかっている。秋の大量出沒が起こる場合は8月に沈静化しない。むしろ、6月、7月よりも目撃の頻度が高まる傾向にある。そしてこれは9月に落ちない。

これは見にくいグラフですが6年ほど前に山形県でまとめてもらったものです。山形県の場合は春の生息調査及び予察駆除というのをやっている。山形県の猟友会の各支部が、担当する領域を1ヵ月間、昔の春のクマ狩りと同じ要領で出動します。山に通って、直接目視で何頭クマを見たか、そのうち予察駆除で何頭捕獲したか、何頭逃がしたか、あるいは対岸にいたクマがどちらの方向に走っていったか、そういう情報を全部地図に書き込んで、各班で報告し合うというものです。そして全体としてどれくらい目撃があったかを報告する。親子を何頭見たとか、1頭しかついていないとか、2歳児だったとか、全部目視で報告する。県全体で56～64頭くらいの捕獲枠を作って捕獲してもらっている。その春の予察駆除が行われている地域は、夏、秋の有害捕獲が少ないという傾向がある。そのモデルです。

そもそもその猟師さんたちですけれども、減っている減っているという風に言われている。予察をする人たちそのものが、伝統的な狩猟をやってきた人たちが、減ってきているんだと。でも、僕は減ってきていることにびくびくしてもしようがないなと思っています。これは社会の動きなので。例えば、これは環境省の統計です。確かに1970年代、50万人を超えるくらいの狩猟者がいました。じゃあなぜ減ったのかというと、ゴルフなんです。簡単に言えば。ゴルフが流行った。その間に安売があって、銃砲の取締りが厳しくなった。だから鉄砲をやめる人が増えた。確かにそうなんです、その人たちの娯楽が何になったかというと、ゴルフなんです。

## ■狩猟は農業を持続するための抑止力■

農業をやりながら猟をしていた人たちが、1970年代の50万人いたうちのどのくらい占めていたかというと、だいたい20万人くらい。10万人を下回らなければもしかしたらいけるかもしれない。この10万人という猟師の底辺というのは、農林業をやっている人たちが狩猟をやっている方々なんです。半農半猟の方々なんです。この上積みの方はそれ以外の人たちなんです。ですから、地域が今人口減少で高齢化しているので、この層そのものが衰退してきたということで危機感があるわけですが、数字だけで言えば、全国で今13～14万人、狩猟免許所持者がいるわけです。この数字をキープできれば、意外と抵抗力としてはそんなにびびる必要もない。問題は猟師の質です。そして、その猟師をどのように支援できるかという社会のシステムです。

そもそも日本の狩猟は、これまで非常に冷たく評価されてきました。特別な人たちがやるこ

とだ。特別な趣味だ。国会議員ですらそう言っていた。でも実は違うんです。狩猟っていうのは、農業を持続するための抑止力なんです。狩猟っていうのは、動物を獲り続けることで自分たちの生命を持続させたいということなんです。動物たちを殺傷することが目的ではないんです。狩猟の目的は、資源を利用することにこそあるのです。動物という資源を自給資源、換金交換資源として利用することです。資源利用をするために殺傷するわけです。趣味ではないんです。資源利用が前提なんです。というよりもそれが前提であった時代がつい50年ほど前までであった、ということですね。

農耕は自然の森や草地を地べたむき出しにして、自分たちに必要な作物を集約的に栽培するわけです。ですから、そこからは動物や鳥は排除されます。自分たちが作った農作物は餌でもありますから。その餌でもある作物を鳥獣から守りたい農民の論理があるわけです。ですから、狩猟者がそばにいてくれるとありがたいわけです。農作物を作れば作るほど、周りに動物を飼って養ってしまうんです。矛盾するんです。しかし、狩猟者から見れば、農耕地周辺に持続可能な猟場が出来上がる。つまり、持続的な資源利用が可能になる。狩猟も農耕もウィンウィンの関係になるということです。これが日本の狩猟と農耕の歴史なんです。ですから、猟友会の中で多くの人数を占めていたのは農家なんです。農家の方々が自らの農地を守るために狩猟という文化を営んでいた。農業という論理と狩猟という論理が、1人の人間の中に養われることになる。この象徴的な文化がマタギ文化と言われているものなんです。マタギ文化というと、綺麗事のように思うかも知れませんが、完全な生活のための論理なんです。自分たちの周りがある限られた資源を、有効に持続的に使っていこうとする。非常に賢い、安定思考なんです。そういうことを前提に狩猟というものを考えなければいけない。これまではそういう風に考えてこなかった。狩猟は特別なものだということで描きあげられてきた。残酷だ、動物がかわいそうだ、そういう論理ばかりが育てられてきた。そうではないということが、我々がもう少し生活というものを基準にした思考に戻れば、当然わかるはずなんです。私たちは日々、命を食べて、頂いて生を持続しているわけですから。

これは私の最初のフィールドの三面の写真です。これがマタギですね。カモシカ狩りの時の服装を着てもらって、雪山を歩いてもらった時の写真です。こうやって昔のマタギは積雪が3~4メートルあるところを歩いていた。カモシカを獲るために雪山に入っていた。マタギと言えばクマという人が多いですが、本当の獲物はカモシカだったのです。

かつて我々の生活が自然に依拠していた段階では、集落があって、周りに畑や田んぼがあって、その周りに里山と呼ばれるような人為的な緩衝帯、植生的には代償植生、いわゆる二次林があり、その周辺に自然林、天然林というものが広がっているという形が存在していた。皆さんのお手元にカラーのスケッチをお配りしています。上段の絵につきましては、1950年代の農村風景、里山風景です。山で畑をやって、木の実を採取して、色々な民具（生活用具）を作る材料にするのに山の植物資源を利用していた。自然を使うことで生活が成り立っていた。なので自然に活かされている、という実感があった。

一方、下の段の絵です。2000年代の同じ風景はどうなっているか。山にあった萱場がなくなって、そこにソーラーパネルが置かれているとか、どんどん自然が変わっていく。1950年代には犬は放し飼いでした。どの村にも犬は放されていました。そして、犬は山に行くとクマやイノシシ、シカ、サルなどを追ってくれていた。動物たちを人間の生活空間から追っ払ってくれていた。犬の縄張り意識を人間社会の中に組み入れて、人間が直接野生動物と対峙するということもありましたが、多くは村で飼われているイヌたちの社会がこの任を負っていた。そういう犬を、我々は座敷に上げてしまって、飼ってしまった。私たちの日常を守ってくれていた犬という武器を、私たち自らが捨ててしまったんです。人々の生活と犬の縄張りとはリンクしていた。そしてバランスが保たれていた。

同じように都市も、周りに近郊農村があって、その周りに中山間地域があって、その外に山

間集落がある。都市も同心円的に沢山の町や村が存在することで守られていた。直接都市が野生と向き合うという構造はなかったのです。ですから、昔、金沢市の城下にクマが出てくるなんていうことはなかったはずで、ではなぜ今出てくるのか。「地域で生じている野生動物の出没問題は、都市にとって無縁ではない」と。これ、実は10年くらい前にしゃべったパワポです。無縁どころか、今は日常的に出てきます。当時、この図を作った時には、そろそろ来ますよと言っていました、都市の人たちにはピンとこなかった。早かったのです。やはり出てみないと人は感じない。経験しないと分かってはくれないのです。我々はそれだけ自分たちの日常にばかり関心があって、周りに関心がなくなっている。皆さん意外と見ていないんです。クマが道路を歩いている、何か通ったなというくらいで。都市も同じで、無意識のうちに安全だと思いこんでいるけれども、その周りに村々があってそれが機能していたから安全だったんです。その村々が衰退している現在、都市に動物が寄ってくるのは当たり前だということなんです。

これは、人口動態に対してどんな変化が我々に起こっていたかを示しています。過去、我々と野生動物の関係で激烈だった頃がありました。それは、江戸時代の前期です。この時代に色々な記録があって、青森県の八戸藩、弘前藩、岩手県の南部藩の史料を紐解いていくと、1600年代から1700年代くらいまで、物凄い勢いでイノシシが荒れまくっている。イノシシ飢饉という言葉があったくらいで、農作物がイノシシに食いつくされて人間の食べるものが無くなった。イノシシを駆除するために八戸藩は動くのですが、大型野生動物を捕獲出来るような猟師がいない。そこへ、秋田から密猟に来ていた猟師がいて、その密猟者から猟の手ほどきを受けて捕獲の仕方を教わった、あるいは加勢して貰ったという文章まで出てくる。つまり、農地を拡大すると野生動物は邪魔になって追われるわけです。そして山の奥へ奥へと押し上げられました。その押し上げる力が我々の中からなくなったので、今は降りてくるわけです。

では、なぜ押し上げられる力がなくなったのかということ、象徴的なのがこれです。1950年代は農林水産業に従事している第一次産業従事者は約39.8%いた。今は、2015年の統計ですが、3.6%。もはや3%を切る勢いです。農林水産業でご飯を食べていると胸を張って言える方が、100人の中の3人しかいない。そして今日では、第三次産業就業人口が、サービス産業に従事している人たちが70%を超えている。現時点では76%という数字もあります。この第三次産業の人たちは、自然とは全く関係なく生きていくわけ。ほとんどがインドアの生活です。家から車で移動して工場に入る。会社やデパートに入る。日中ほとんどの方々がビルや建物の中で働いている。つまり、自宅と勤め先の間は移動だけです。自然を観察するということが自體がない。農家の方々は毎日野良に出ている。それでも野良に出ている時間は相当減ってきています。このことが野生動物に隙を与えている。その隙を誰も埋めていない。野生動物からすれば、現在の人間社会は隙だらけ、というわけです。

これは人口動態です。石川は宮城県の次で4番目です。人口が減少しています。宮城県における仙台市と石川県における金沢市はほとんど同じ傾向にあります。東北の中で現在も唯一膨張しているのは仙台なんです。その他の5県の県庁所在地は縮小化が始まっています。地方都市で膨張していたのは2010年くらいがピークです。2010年を過ぎてからはスポンジ化が進んでいます。スポンジ化とは、先にも述べましたが人口密集地の中にぼつぼつと駐車場や空き地ができる現象のことです。

つまり、日本人という集団の生き方が、50年前と現在では全く違う。しかし、我々の中に変わったという意識、自覚はない。変わったということを自覚するところから始めないと、クマ対策はできない。

過去には狩猟だけでご飯が食えた時代もありました。それは海外に毛皮を輸出していた時代があったからです。ヨーロッパとの貿易を再開した時、ヨーロッパは毛皮を欲しがった。最初に輸出されたのは明治23年、横浜港から。26万枚のイタチの毛皮が輸出されました。明治

近代以降日本は軍拡に向かいます。そして軍隊が使う防寒毛皮を大量に必要とした。ヨーロッパに輸出するための毛皮と、自国の軍隊が消費するための毛皮需要がぶつかり合います。だから毛皮は高騰しました。「バンドリ」と呼ばれたムササビを夜中に3頭とれば、公務員の月給くらい稼げていたという話もあります。今で言うと、ムササビ1頭が7～8万で買い取られた。だから狩猟をした。これはあまり正確な統計ではありませんが、日清、日露の戦役の時に狩猟者の数が増える。なぜか。戦争で毛皮が必要となり、毛皮が高騰するから狩猟者が増えたのです。

昭和になってから、とくに太平洋戦争の最中には軍隊に毛皮を供出するようになる。地元には猟友会が作られて、猟友会の人々はノルマを課せられ、ノルマ通りにうさぎを獲って軍隊に納める。納められた毛皮は海軍や陸軍の被服本廠に集積され、そこで加工されて兵員用防寒毛皮として軍隊で使用された。そういう歴史があります。北杜夫さんという作家の『楡家の人々』という小説の中にもその頃のことを書かれている。猟友会から命令されてうさぎを獲ったと。そして主人公が猟友会から表彰されて喜んでいる。その表彰された賞状というのが山形県には結構残っています。これは私の祖母が表彰されたものです。東条英機の名があります。

ですからこの頃は動物が減っていったんです。そしてこういう軍隊の飛行帽に使われていたんですね。これは富山の葉の写真ですが、こういう風に加工作されて生葉として野生動物資源は売買もされた。換金ができる産業でもあった。ですから昔は、農業をやりながら半農半猟という生活が成立した。ところが、産業構造が変化していくと景観まで変化した。景観が変化していくと、どんどん森が手放されていって、草地や二次林が成長して再生林となり、針葉樹を主体とした植林も進められ、気がつけば野生動物が生息し繁殖もでき、移動しやすい環境を我々自身がつくってきたのです。

これは同じ村です。1947年の空中写真と2005年の空中写真です。多くの面積で焼畑農業をやっていて、村の周りは畑だらけです。そして草地や二次林、人びとは盛んに村の周辺を拓き、利用し、罾をかけ、鳥獣防除用の案山子や鳴子、猪垣、狩猟活動も展開していました。だから野生動物なんか来やしないんです。犬も放しているし、猟師も元気。今は村が森に飲み込まれそうな勢いです。これを「攻めてくる森」と名付けました。

これはマタギで有名な集落ですが、戦後まもなく米軍が撮った写真で、ほとんどが山は伐り開かれて耕地化されています。50年後の2001年には、ほとんどが植林に置き換わってしまった。村が森で覆われてしまった。平成に生まれ育った子たちは、日本は森の中にあるという印象です。でも明治に生まれた人たちは、集落は周りに森がないという印象を持った。全く違う風景を生きているわけです。

これは静岡県の静岡市清水区の宍原という集落で、昭和30年代、昭和50年代、平成16年の空中写真です。同じ場所です。もともとは物凄く勤勉で田畑を耕していた。昭和の後半になると、まず里山が投げられ、全部植林されてしまう。平成になったら今度は田畑が投げられます。ここにいる人たちは車で1時間ほどで静岡の街まで行けますから、そこへ勤めに行くわけです。今の人々にとって、この周りの山々はあまり意味がない。昭和30年代には生活がここにあった。昭和50年代には生活が離れ始めていた。こうなって久しい村々が石川県にもたくさんあると思います。お隣の富山にも。その中で自分たちのクマ問題を考えていただかないと先へは進めない、ということなんです。

## ■総力戦で挑む必要・狩猟の「公共性」■

先ほど、皆さんで力を出し合って総力戦で挑む必要があるという話がありましたが、なぜ総力戦にするかという、猟師さんをお願いしておけばいいという問題ではなくなっているんです。これは公共の問題なんです。例えば今、狩猟者がイノシシを1頭獲ると、報奨金が支払われます。これは全部税金なんです。なぜイノシシを獲ると税金が払われるのでしょうか。若い

猟師を育てる研修会も多くは農林水産省からの補助金で賄われています。なぜでしょう。狩猟という行為が「公共性」を有しているからなんです。猟師が勝手に山に行ってクマを1頭獲ったとします。その人がクマで儲けたとします。しかし、そのクマを1頭獲ったことによって、そのクマがもたらすであろう被害が軽減されるわけです。農作物に被害が及ぶ機会が減るんですね。

これは北上山地なんですけど、複層林施業という管理された森林をつくる動きが始まっています。しかし一方で、里山がかなり放置林になっています。管理されていません。つまり、クマや野生動物にとって、餌は奥山よりも手前の里山の方が豊かになりつつある。そしてその側に農作物がありますから。里山は「奥山化」している。動物は奥山にいるという幻想はなくなって、動物は里山の方に降ろされている。コアはもはや下にきていると言ってもいいくらいです。

色々な意味で我々にとっては負の材料が多い。我々が自然から離れてしまったということがかなり大きな理由としてあります。昔、野生動物を奥山に押し上げていた力はもはや無くなってきた。中山間地域の集落も櫛の歯が折れるようにどんどん力を失っていきました。みんな意識が山よりも街にいくんです。生産よりも消費にいくんです。そういう意識の変化が山の力を失わせ、力を失った隙間を野生動物が見てとって、人間の地域に出てくるようになる。これをもう一度取り返すのか、取り返さないのか。我々は自然から撤退しているんです。撤退した後どうするのかを考えないと、この先は混乱しかない。すなわち「撤退のシナリオ」がいるのです。どこまでを自然の領域に返し、どこまでを人間の領域とするのか。それを見きわめてゆかなくてはなりません。さらに「私的所有権の強化」という問題もあります。行政がどんなに良い計画を立てましても、土地の所有権は民間にあるわけですから、この民間の合意や協力が無ければ道路一本通せない。この問題も私たちの未来を考えると大きな足かせになってきています。さて、「公共」と「私」をどのように私たちの社会は考えてゆくのか。大変な問題です。

## ■「イヌの放し飼い特区」クマに対する人間側のメッセージ■

最後にお伝えしたいのが、これまでは対処療法だったということです。出ておいでと言うくらいの誘引待ち伏せ猟的な対応をしてきた。それをいつまでも続けないで、そろそろクマに対して出てきてはいけないというメッセージを送らなければいけない、そう考える訳です。

では、どのようにやっていくのか。僕はそろそろ本気で犬の群れを導入した方が良いと思っています。即断はできないのです。色々なデータをとって、どういう風に犬の群れを使うか、どのようにすれば持続性のある使用ができるのかといった、犬の本格的な導入の可能性を探ることをまずやってみる必要がある、と考えています。それは先ず「犬の放し飼い特区」のようなものを作って、野生動物側が来たくなくなるような教育をしなければならぬ。例えば極端な言い方をすれば、動物愛護に反しますが集団で石を投げるとか。何もしない、ノンリアクションはまずいのです。動物を見たら石を投げて追い出すくらいの勢いがないと、人間が負け続けてしまう。それは例えば、自宅で飼っているネコが、テーブルの上に飛び乗って、そこにある食べ物に手を出そうとする。すると飼い主の方はテーブルを叩いて「コラッ！」と一喝して、ネコにテーブルに乗ってはいけないとメッセージを發します。ネコはそのことで学ぶことになる。このような学びをクマにして貰う必要がある。つまりクマに対して人間の側が明確なメッセージを發する必要があるのです。

対処療法として実施している対処捕獲、駆除では、同じことが繰り返される。出てきたら捕獲、出てきたら捕獲のくり返しでクマは一切学習しない。そこで犬を使って学習能力の高い、クマの性格を利用して出没を回避していく試みなのです。人間とクマの間に犬の群れを導入することでひとつのバッファーを作り出す。現場に立てる人間の数が期待できない以上、最早犬の力を借りるしかありません。

ロシア極東の先住民族の村などは、現在でも犬を放し飼いにしています。それは周囲の森にク

マヤトラが生息しているので、集落を周辺に棲む野生動物から守るために犬の存在は欠かせない。クマはとくに犬が苦手である。とりわけ2、3頭の犬に囲まれるとどうしようもなくなる、退散するしかなくなるのです。そのために犬を放しているのだと、先住民の猟師たちは話しています。犬に明確な役割を与えれば、犬は力を発揮するのです。元来、犬とはそのような存在であり、私たちの日常を彼らの社会が守ってくれていたわけです。その彼らの力を解体してしまったのは私たち自身です。私たちが野生を理想化してしまい、現実の野生を意識的に飼い慣らしてきてしまった。この私たちの愚かさを反省し、また狂犬病や人を噛む犬などのリスクをどのようにこちらが引き受けるかという、またそのリスクの回避策を「特区」を作って手法を編み出そうというわけです。「特区」で成功すれば、これを全国的に広げてゆくということになります。犬はクマばかりではなく、イノシシやシカ、ハクビシンなども追ってくれます。カモシカも追ってしまいます。ですから、どのように放すのか、飼育調教をどのような形にするのか。犬を放す場所や時間帯なども考えてゆく。すなわち人間の生活空間を保持するためにはもう犬の力を借りた方が良いということです。現在進められている対処療法や若手ハンターの養成と同時にこれも進めてゆく。犬を放すことは即効性があると思います。そしてこのような状況を地域の住民が自覚し、その自覚に基づいた手法を展開する。行政はこの住民の自覚と意志をサポートしてゆく。それが理想であろうと思います。

環境省がゾーニングを推奨していますが、これは福島県のモデルで、「クマの生息ゾーン」と「緩衝地帯」と「人の生活ゾーン」という3つの空間に分けて、ゾーン毎にやり方を変えていくと。ゾーン毎に役割を変えていって、そのゾーンの意味を動物たちに認識させる。これを繰り返し日常の中でやっていくしかない。そのためには猟友会だけではなくて、一般の市民の人たちに協力してもらいたい。毎日歯を磨くように何か行動を起こしてほしい。

例えば、犬の散歩コースをきちんとつくって糞も放置しておく。犬がいることをクマたちに認識させる。ペットフードの分では効き目が無いかも知れませんが、これもテストすべきです。ともかく1人だと小さな力ですが、10人ですれば10頭の犬になる。100人ですれば100頭の犬がいるわけです。それが10日間続けば、1000頭の勢いになるわけです。そういう小さなことを繰り返していった大きな圧力にする必要がある。ノンリアクションの人間から、拒否する人間のメッセージに変えてゆく。

一つの手法としては先ほどお話しした山形県で行っている春の生息調査と予察駆除。いわゆる春のクマ狩りの再開を考えるということもあるでしょう。

## ■大切なこと、幸せは自分たちの手で守る■

現在は撤退の時代なのです。第1次産業から第3次産業へと、私たちの生き方はこの100年で大きく代わりました。昔ながらの田園風景、牧歌的自然に酔う憩いの自然、そうではない。自然は怖いのです。恐ろしいけれども尊いのです。私たちは震災や集中豪雨で、毎年のようにこれを体験し、尊い仲間を失っている。私たちは自然の外では生きてはいけません。この恩恵を受け続け、このリスクを背負いつづけるためには、私たちは学ばなくてはなりません。野生動物問題は、一重に私たちの生き方の問題でもあります。人口減少が進み、人間の生活活動域が縮小し、森が村や街に迫ってくるなかで、どこまでを自然に返却し、どこから人間の空間とするのか、そのゾーニングのあり方を考える必要があります。先にも言いましたが、私は『撤退のシナリオ』という言葉で語ってきました。これはそこに生きてゆく人々が決めなければなりません。そしてこのことがゾーニングにも反映される必要があります。そして犬を放す空間にも関わってくるようになります。

大切なことは、自分たちの幸せは可能な限り、自分たちの手で守ってゆくこと。地域の仲間と共に生きてゆく道を、今きちんと話し合う必要があるように思います。時間を超過してしまい、中途半端な終わり方になってしまいました。ありがとうございました。